

巻頭言

東アジアの唯物論研究者の研究交流の第一歩

平子友長

東京唯物論研究会（以下、東京唯研と略記）は、二〇〇五年八月、中国弁証唯物主義研究会、中共中央編訳局、清華大学という三つの研究団体・研究機関との連続共同研究会を行った。東京唯研にとって、一九五九年創立以来四六年の歴史の中で海外の唯物論研究団体と行ったこれが初めての国際的研究交流であった。以下に「巻頭言」の紙面をお借りして、八月の日中共同研究会の内容とその成果についてご報告させて頂きたいと思う。

東京唯研からの参加者は一二名であった。運営委員会からは平子友長（委員長）、渡辺憲正（副委員長）、長野芳明（事務局長）、吉田傑俊、岩佐茂が参加した。公式行事の開催期間は八月二二日から三〇日まで、滞在場所は北京市西部郊外の首都鉄鋼集団紅樓迎賓館であった。

最大の行事は、八月二三日、二四日に紅樓迎賓館で行われた中国弁証唯物主義研究会との共同研究会であった。この研究会の準備にあたっては、中国弁証唯物主義研究会副会長の厩元正教授、同秘書長毛衛平教授が事務局を担当した。日本側との意思疎通、通訳は一橋大学への留学経験もある中央編訳局の馮雷氏があたった。会場設営、宿舍提供その他企画、運営、財政全般に渡って、中央党学校と首都鉄鋼集団から全面的な支援を受けた。この両組織の暖かいご支援とご協力に対して、この場をお借りして心から感謝を表明したい。

東京唯研会員からの報告者は、以下の六名であった（以下、報告の順番に氏名、報告タイトルを記す）。

平子友長「後期マルクスの資本主義認識の変遷」、吉田傑俊「マルクスの市民社会論」、渡辺憲正「『経済学批判要綱』の共同体／共同社会論」、尾関周二「史的唯物論の現代的構築のための基礎カテゴリーの再考ーコミュニケーション論と環境論からのアプローチ」、長野芳明「人間認識の新たな探求」、干場 薫「マルクス主義と言語問題」。

中国弁証唯物主義研究会会員からの報告者は、以下の七名であった（以下、報告の順番に氏名、肩書き、報告タイトルを記す）。

楊春貴（中国弁証唯物主義研究会会長、中央党校副校長）「鄧小平理論の哲学的基礎について」、李徳順（中国弁証唯物主義研究会副会長）「伝統社会主義認識に対する鄧小平の三つの超越」、楊耕（中国弁証唯物主義研究会副会長）「歴史唯物主義：批判的世界観」、王東（中国弁証唯物主義研究会副会長）「二一世紀哲学革新論ーマルクス主義哲学の現代形態論」、厩元正（中国弁証唯物主義研究会副会長、中央党校哲学部主任）「創新実践と創新実践的唯物論」、毛衛平（弁証唯物主義研究会秘書長）「認識の社会化に関する概要ーマルクス主義の認識論研究に於ける一方向」、侯才（中央党校教授）「『悟性』概念とマルクス主義哲学認知構造の建て直し」。

通訳は、中央編訳局の馮雷氏、清華大学の韓立新氏その他三名の若手研究者が努めた。

八月二五日には、中央編訳局を訪問し、午前中に日中の史的唯物論研究の現段階を共通テーマとする共同研究会を開催した。

東京唯研からは岩佐茂会員が「グローバル化のなかのマルクス」、渡辺憲正会員が「史的唯物論研究におけるいくつかの論点について」を報告した。中国側からは李恵斌教授（中央編訳局当代所副所長）が「唯物史観の提綱について」、梁樹発教授（中国人民大学当代中国研究所）が「中国学者近年来の唯物史観研究について」、韓立新副教授（清華大学人文学院）が「中国に於ける『ドイツ・イデオロギー』研究の現状」についてそれぞれ報告した。

八月二六日午前中は、中国第四の規模を持つ首都鉄鋼集団における鉄鋼生産について姜興宏氏（首都鉄鋼総公司党委員会副書記、中国弁証唯物主義研究会理事）から説明を受け、その後工場内を見学した。同日午後は、清華大学人文学院を訪問し、中国の若手マルクス研究者と共同研究会を行った。研究会においては渡辺憲正会員が「初期マルクス研究の問題」について、平子友長が「マルクスにおける唯物論と弁証法」についてそれぞれ報告した。

八月二八日から二九日までは、中央党学校哲学部の馮桂蘭教授、陳中浙教授、張琳副教授、李宏偉講師により、北京近郊の旧跡、戦跡などを案内して頂いた。

八月二七日は、盧溝橋を訪れ、抗戦記念館を見学した。

八月二八日は、万里の長城（居庸関）を見学した。午後は、頤和園を見学した。

八月二九日は、中日友好環境保護中心（センター）を訪問し、同センターのスタッフによるセンターの活動の紹介を聞いた後、センター内を見学した。

見学の合間には、素晴らしい中華レストランに案内して頂いた。本場北京料理のみならず、四川料理、西安料理などを心ゆくまで堪能した。また張琳女史の美声による中日の歌唱も忘れることができない。馮桂蘭教授をはじめ中央党学校哲学部のスタッフの方々には本当にお世話になった。お陰様で研究会後の催しも実に充実したものとなった。この場をお借りして心からお礼申し上げたい。

全部で三つの研究団体との四日に渡る研究会を通じて感じたことは、現代中国の唯物論研究者の日本の唯物論研究およびマルクス研究に対する関心の高さであった。特に、中国弁証唯物主義研究会からの参加者は、いずれも会長、副会長クラスの会員であったこと、とりわけ会長の楊春貴教授は中央党学校副校長であり、副校長の地位は中国政府の各省の次官級に相当するという。楊教授は激職にあるにもかかわらず、二日間の会議全体に出席し報告と討論に熱心に耳を傾けられていたことが、非常に印象的であった。

いわゆる鄧小平の改革以降、中国は本格的に市場経済を導入し、現代中国経済はグローバルな資本主義システムに完全に包摂される経済圏となった。その結果、中国は驚異的な経済発展を遂げ、北京や上海はすでにグローバル・シティの性格を帯びるに至った。しかしこのことは、他面では、世界資本主義システムが地球大で惹起しているあらゆる深刻な諸矛盾が中国国内に凝縮的に発生している（一例を挙げれば中国は貧富の格差が世界一大きい国である）。にもかかわらず政治システムとしてはこの国は今の所、中国共産党の一党制を崩していないし、共産党の依拠するイデオロギーは依然としてマルクス・レーニン主義である。経済の資本主義化の進展と共に地域的・社会階層的な利害の不一致は明白となり、これが多党制の下で政治的表現を獲得するようになれば中国は一举に国家の分裂と内戦の危険に見舞われる恐れがある。市場経済化に伴う経済的混乱はある程度避けられないとしても、それが政治的混乱に連動することだけは極力回避したいというのが、現代中国

の指導層の共通の関心であろう。

現在中国共産党指導部は、一方では、グローバル資本主義の競争圧力に適応しつつ国内の企業経営能力、生産技術や労働力を高める努力を払いつつ、同時に、不可避免的に生じる貧富の地域的格差、広域的環境破壊などの問題に効果的な対応を迫られている。中国が現在直面している問題は、その規模の大きさと深刻さの両面から人類が未だ経験したことのない問題であるといえる。現代世界において支配的影響力を持ついずれの思想・政策体系もこれらの問題に有効に対処することができるヴィジョンをいまだ提起できずにいる。現実から理念にいたる底知れぬカオス状況の中で、中国のマルクス主義も生き残りを賭けた自己変革を要求されている。この切実さが、現代中国の唯物論研究者、マルクス研究者たちを新しい情報獲得と新しい研究スタイルの模索へと駆り立てているのだと思う。

確かに日本のマルクス研究者はマルクス、ヘーゲルなどの文献解釈的研究においては中国の研究者よりも少し進んでいるかもしれない。またこの点が、中国の学術団体や研究機関が日本の研究者との研究交流を熱心に求める理由でもある。しかしこれまでのところは日本の唯物論研究者たちの間に国境を越えた研究者の交流を求める問題関心があまり強かったとは言えない。このことは、資本主義システムのグローバル化がこれだけ進展しても、日本の唯物論研究のグローバル化はほとんど進展していないし、外国のとりわけ東アジアの研究者とは是非でも交流したいという内発的関心が培われていないことを示してはいまいか。同時に常に社会的少数派の地位に甘んじてきた日本の唯物論研究者の側には、自己の依拠する理論の現実性・実践的有効性について深刻に反省する伝統が弱かったことを示してはいまいか。マルクス主義を一三億の人口を擁する国家の政策の基礎付けとして研究せざるをえない立場にある中国の研究者との決定的違いがここにある。両国の研究者の真摯な学術的交流から私たち日本の唯物論研究者が学ぶこともまた計り知れないほど大きいことを確信する。

日本の唯物論研究が相変わらず日本の政治的経済的状况に閉塞され、それにもつばら問題意識と対抗意識を呪縛され続けるならば、二一世紀にふさわしい唯物論研究は展開できないだろう。日本の唯物論研究の問題意識の地平をこじ開けて、東アジアの地平にまで押し広げ、そこで得られる経験を栄養にして唯物論研究を根本的に変革したい、そのような切実な想いから、今回の共同研究会が実現した。